

新年のごあいさつ

平成 27 年元旦
院長 片岡慶正

明けましておめでとうございます。

皆様には、健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

今年は未（ひつじ）年ですが、干支にちなんで“安らかで穏やかな一年”でありたいものです。十二支では羊（ひつじ）を未とするようですが、『説文解字』によると未は「味」で、“果実が熟して滋味が生じた”状態を示す意味があるようです。本年は病院経営計画第 1 期 3 年（平成 24 年～26 年）の最終年から第 2 期（平成 27 年～30 年）に移行する節目の重要な年度です。昨年は高度先進機器の導入をはじめ総合インフラ整備のピークを迎えた年度でしたが、多くの事業がきわめて堅調に稼働していることは頼もしい限りです。そろそろ第 2 ステージに入り、今年は干支にあやかり“滋味豊かな実り”を創出する時期と認識しています。

昨年の今頃は元旦からの電子カルテのスタートで大騒動でしたが、その後 1 月末からの 3 次元バイブレイン・フラットパネル血管造影装置、6 月からの内視鏡手術支援ロボット（ダ・ヴィンチ）稼働、9 月の放射線治療施設工事の完成という一大イベントをすべて堅調に遂行できました。本院の放射線治療施設は明るい雰囲気醸し出し、ご利用される皆様からご好評をいただけるものと確信しております。現在、放射線治療「リニアック」スタートに向けた最終調整段階にあり、市民の皆様のご期待に応えるように、今後はシームレスに連携された“がん診療”の充実に努めてまいります。健診センターでの早期発見を含めて、診断から外科的治療、化学療法、放射線治療、さらには緩和ケアまでシームレスで、個別に最適化されたがん診療の高水準での提供が可能となります。

ソフト面では、患者総合支援センター、臨床研修センターと経営戦略室がますます充実してきました。今回の診療報酬改定では“医療機関の機能分化・強化と連携、在宅医療”の充実が大きな骨子とされ、地域医療ビジョンの最適化に向けて、病床機能報告の義務付け、地域における役割分担の明確化とさらなる取り組み強化が求められるようになりました。高齢社会における医療の高度化と確実性は必ずしも平行せず、ホスト要因による不確実性などから療養期間の延長が余儀なくされる場合もあります。DPC 医療機関では安全と質を担保して、適切な入院期間での治癒～退院を達成していただくことで、効率的な健全経営が可能となります。最新の電子カルテ導入から 1 年が経過しましたが、リアルタイムの電子データの可視化と活用により、多くの情報が共有化され、院内連携が強化されてきたことを強く実感します。現在、大幅な救急受け入れ増加の中、平均在院日数は新基準でも 13 日未満、在宅復帰率は常に 90%超を維持しています。

ER 専属医師と意欲ある若手医師の増員によるスタッフ強化は、救急診療現場の活性化をもたらし、市民の安心と信頼の獲得という大きな成果に繋がり、昨年12月からのドクターカーの試行運用も明るい話題です。超高齢者の救急搬送と緊急処置・手術には複合リスクから大きな諸問題を有しながらも、ADLを保ちながらの高い在宅復帰率と長期入院患者の大幅減少は、本院の有する医療の質の安定的高さと地域を含めた院内外連携強化の賜物であると考えます。皆様方のご協力に感謝いたします。

本院では、日本医療機能評価機構、ISO9001（国際標準化機構）、NPO 法人臨床研修評価機構という第三者機関のトリプル認証により、医療の質向上に向けた取り組みを推進してきました。さらに昨年からは、日本病院会のQI（クオリティ・インディケーター）プロジェクトに参加し、その成果をHPで公開しています。一度ご覧いただければ幸いです。QIは“医療の質を表す指標”で、紹介率、逆紹介率、患者満足度調査、退院後6週間以内の救急医療入院率、入院患者の転倒・転落発生率、褥瘡発生率、手術前予防的抗菌薬投与率、尿道留置カテーテル使用率、糖尿病患者の血糖コントロールHbA1c7.0%未満率、脳梗塞における入院後早期リハビリ実施症例の割合、脳卒中患者の退院時、抗血小板薬を処方した割合、急性心筋梗塞患者におけるアスピリン投与割合、救急車・ホットラインの応需率など多岐に渡ります。全国220病院が参画していますが、互いにその成績を競い合うのではなく、経時的なQI測定と目標を持ってPDCAサイクルを回すことにより、医療を透明化・可視化することで自施設の立ち位置を知るものです。

医療データの活用の一つとしてQIプロジェクトをご紹介しましたが、複数の医療機関や地域を結ぶICTによる地域医療ネットワークの充実に大きく期待するものです。今後ますますの充実が望まれる在宅医療と病院機能のフル活用には“かかりつけ医”との緊密な連携が必須となります。びわ湖メディカルネットやあさがおネットの発展に大きく期待するものですが、本院としてできることは何でもする決意の下に、地域医療の将来ビジョンに大きな夢を抱いています。患者の皆様には、地域における“かかりつけ医”と本院のような急性期医療病院との役割分担と機能分化・連携についてご理解いただき、“紹介”と“逆紹介”の有効活用をお願いいたします。

この3月には放射線治療「リニアック」が稼働します。文字通り本院では、シームレスに連携された“がん診療”の個別化医療の最適化に向けた環境が一気に整うこととなります。1月1日付けにて京都大学医学部消化管外科学准教授で胃・食道外科エキスパートの岡部寛先生を本院の外科部長（消化管部門）にお招きしました。新年早々明るい話題を皆さまにお伝えできるのは望外の喜びです。「市民とともにある健康・医療拠点」の具現化に向けて、今年も邁進させていただきます。皆様方のご支援をお願いします。新しい年が皆様にとって、未（ひつじ）年にちなんで穏やかで幸多い年でありますようにご祈念いたします。

本年度のキーワードは“連動”と“飛躍”です。病院という組織は個々の思いや個々の行動を含めて、“日々のすべてが連動している有機生命体”ともいえるものです。飛躍するには、連動した個々の点検、評価そして改変のプロセスを大切にしなければなりません。職員一同、本年も“地に足をつけて”がんばります。